

祖の事業を繼いで、更にその働きを大にして國を安らかに治めるために王は自ら力を盡されたのである。仲山甫は斯ういふ勝れた王を上戴して居るから、王の精神の在る所を『出納する』といふのは、世の中に普く弘めて、王は斯ういふ心持を以て國をお治めになるのであるから、皆もよく王の意を承けてそれらの事に力を盡すやうにと、皆に教訓を與へたのである。丁度仲山甫は王の喉や舌のやうなもので、即ち王の思つて居ることを王に代つて世の中に宣べ傳へ、人民を教へ勵ます所の働きをしてゐたのである。さうして『政を外に賦す』即ち凡ての國に廣く教化を及ぼして、四方の國々がこれに依つて盛んになつて、『發する』といふのは王の趣意に基いて大に働くことである。仲山甫のやうな人が王の心持を周く國中に傳へたから、皆もよく之を了解して、自分達もそれらの仕事に全力を盡して、王のお心持に叶ふやうにしようといふので、皆奮つて其の業に勵むやうになつたのである。

肅肅王命。仲山甫將之。邦國若否。仲山甫明之。既明且哲。以保其身。夙夜匪

解。以事一人。

肅肅たる王命、仲山甫之を將ふ。邦國の若否、仲山甫之を明かにす。既に明且つ哲にして、以て其の身を保つ。夙夜解るに匪ず、以て一人に事ふ。

仲山甫の精勤

王の命といふものは實に嚴かな尊いものである。此の王の命に基いて仲山甫がこれを實行して國の政治をよく整へて、萬民が皆その處に安んじてその業を勵むやうにしたのである。また多くの諸侯があつてそれぞ

れの領地を治めて居るのであるが、その國の中にはよく治まつて居るものもあるし、またその諸侯たる者の徳が足りなければよく治まらないのであるが、其の道に適つたやうに治まつて居るか居ないかといふことを、仲山甫が一々これを明かに觀察して、その良きものはこれを奨め、その悪いものはこれを戒めて改めさせるといふやうに努めて行つたのである。仲山甫といふ人は洵に智慧も明かに、また『哲』で、物事を深く考へる所の力のある人である。斯ういふ人であるから王もこれを信任して、身分をも高くし領土をも與へるのであつて、その一身も至つて安らかであつた。併し如何に自分の身分が高くなつても、また重く待遇されても、朝早くから夜遅くまでも少しも懈るといふこと無く、まだこれでは足らぬといふやうな考へで、能く其の身を慎しんで、『一人』即ち天子に事へて居るのである。それだから益々その徳の高いことが世の中に知れ渡つて、多勢の人がこれを仰ぎ貴ぶやうになつたのである。

人亦有言。柔則茹之。剛則吐之。維仲山甫。柔亦不茹。剛亦不吐。不侮矜寡。

不畏彊禦。

人亦言へるあり、柔は則ち之を茹ひ、剛は則ち之を吐くと。維れ仲山甫、柔も亦茹はず、剛も亦吐かず。矜寡を侮らず、彊禦を畏れず。

仲山甫の宏量

世間の諺に言ふには、『柔かいものならば呑み込んでしまふけれども、固いものは呑み込めないから吐き出す』といふことである。これは世の中に立つて相手が優しい人であるならば仲好くして行けるけれども、

剛情我慢な者は逆も相手にならないから、斯ういふ者は排斥してしまつて交はらない方が宜いといふやうな意味で、當時世間に行はれた諺であります。併し多くの人の上に立つて世の中を治めるといふやうな人は、さういふやうに相手に對して好き嫌ひの念を持つてはならない譯である。それだから仲山甫は柔を食ひ剛を吐くといふやうなことはしなかつた。相手が善人でも悪人でも、優しい者でも剛情な者でも、皆これを包容して、自身は徳を以てこれに臨むから、如何なる者でも自らこれに懐いて來るのである。これは人の上に立つ者の態度として最も立派なものである。而もまた極く哀れな頼りの無いやうな者をも侮らないし、また『彊禦』といふのは剛情な者で、自分の思ふことは飽くまで押通すといふやうな者をも恐れなくて、如何なる者をも占懐け、如何なる者をも皆恩を以て導いて行くといふ態度である。これこそは多くの人のの上に立つて普く世間を指導して行く人として、申分の無い態度と謂ふべきである。

人亦有言。德輶如毛。民鮮克舉之。我儀圖之。維仲山甫舉之。愛莫助之。

衰職有闕。維仲山甫補之。

人亦言へるあり、徳の輶きこと毛の如し、民克く之を擧ぐることを鮮しと。我儀く之を圖る。維れ仲山甫之を擧ぐ、愛しきかな之を助くること莫し。衰職闕くること有り、維れ仲山甫之を補ふ。

仲山甫の努
力

世間一般の人の言ふのに徳を磨くといふことは甚だ輶い。——『輶い』といふのはやらうと思へば必ず出來ることである。丁度毛といふものは非常に軽いものであるから、指で摘めば直ぐに持上げることが出来る

が、それと同じことで徳を磨くといふことも、さう難かしいことではない。自分の心懸け一つで、やらうとすれば出来ることである。それであるのに世間の多くの人は『之を擧ぐることを鮮し』——徳を磨くといふことに力を盡さないのである。努力すれば出来ることであるけれども、努力しないから何時まで経つても人間が善くならないのである。併しながら志の堅固な者は『儀く之を圖る』——どうしたら行ひを磨き、どうしたら徳を養へるかといふことを能く考へて居るのである。即ち仲山甫といふ人などは、實際その徳を養ひ行ひを磨くことに長じた人であつて、『之を擧ぐ』——常に之を實行して居るのである。とても此の仲山甫に匹敵する者は無い。『愛しい哉これを助くること莫し』——世間を見ても仲山甫を助けて、仲山甫の相談相手になるといふやうな者は、甚だ残念なことであるけれども何處にも無い。これは仲山甫の最も勝れた人であるといふことを、言を極めていつたのであります。斯ういふ勝れた人であるから『衰職』といふのは天子の爲職で、『衰』といふのは天子の着る着物のことであるから、即ち天子の職に譬へたのである。その天子の爲ることに『闕くること有り』といふのは、まだ充分でないことがあれば、仲山甫がこれを補うて、常に王を輔けて國中の者が皆満足するやうに國を治めて行くことに力を用ひるのである。これ程に仲山甫といふ人は勝れた人である。

仲山甫出祖。四牡業業。征夫捷捷。每懷靡及。四牡彭彭。八鸞鏘鏘。王命仲山

甫。城彼東方。

仲山甫出て祖す、四牡業業たり。征夫捷捷たり。毎に懷へば及ぶこと靡けん。四牡彭彭たり、八鸞鏘鏘た